

夕闇の田町で研鑽を積み日本を支えた人たちに捧ぐ

博物館 資史料館部門長 広瀬茂久

本稿は「蔵前修工会会報」第 109 号 (2017.2.1) への寄稿文に図を追加したものです

天皇陛下の生前退位が話題になった年に、100 年以上に渡る歴史と伝統を誇る蔵前修工会の解散の準備を始められた会員の皆様には万感胸に迫るものがあるのではないのでしょうか。その思いが結晶化する形で田町キャンパスに専攻科の記念碑が建立されるのは意義深いことです。

日本の近代化の原動力となった産業の発展を支えたのは工業教育でした。その中心にあったのが「蔵前」です。名前のとおり江戸幕府の米蔵があったところで隅田川の水運も考慮した立地となっていました。明治になり、一時的に書籍館（浅草文庫という一種の図書館）として利用された後、東京職工学校（東工大の前身）の地となりました。この創設に深く関わったのが手島精一とワグネルです。ここでは先ず、彼らの生い立ち、出会い、そして蔵前職工学校とその夜間部ともいべき工業補習学校の誕生について紹介し、続いて、本稿表題のような私の気持ちを綴ってみたいと思います。

廃藩置県と専攻科

ワグネルと手島精一が出会い、明治政府に近代的な「ものづくり」のための技術教育の場を作るように働きかけるきっかけが廃藩置県 (1871) にあったと思われまます。歴史を少し辿ってみましょう。ワグネルは、手島より 20 歳近く年上ですが、ドイツでは数学で博士号を取得しています (21 歳)。その時の指導教官が有名なガウスです。フランスで語学や数学の教師及び翻訳官などの仕事をする傍ら、化学の講義を聴講し化学者としての素養も身に付けます。社会人教育の先駆けであり、蔵前修工会会員にも通じる学びの精神ではないのでしょうか。その後、スイスで工業学校の教師をし、再びパリに戻って弟と一緒に化学工場を始めますが残念ながら失敗に終わります。そんな時に持ち上がったのが日本行でした。ワグネルの親友が持ち込んだ話ですが、「米国の企業が日本に石鹼工場を作る計画を立てているが、それを手伝ってくれないか」という誘いを受け、長崎にやってきました (36 歳)。石鹼は、予想に反し、当時の日本では急速に普及せず、この事業も失敗に終わります。次に、佐賀藩に雇われ (39 歳)、有田焼の技術指導を行っていたのですが、半年もしないうちに廃藩置県となり、雇い主の藩がなくなり失職。今度は明治政府のお雇い外国人として、東大の前身校で独語や自然科学を教えることとなります。彼は基礎科学の高等教育とは別に、工業技術教育の場も必要と考えていましたので、文部省に働きかけて「製作学教場」を附設して貰う

ことに成功し、その教師となります (43 歳)。

この製作学教場の監事として派遣されたのが手島精一で、ここで二人は出会うこととなります。少し遡って手島精一の歩みをたどってみましょう。江戸の沼津藩邸で生まれ育ちましたが、10 歳頃に父の知人（同藩士）のたつての願いで養子となります。その後 17 歳の時に、幕府寄りだった沼津藩は上総（千葉、菊間藩）に移封となります。20 歳の時に藩から資金を借りて米国のフィラデルフィアに渡りラファイエット大学で建築と物理学の勉強を始めようとした矢先に、廃藩置県で藩からの仕送りが無くなり窮地に立たされます。この時に岩倉使節団の一行に会い通訳を務めた縁で、使節団に同行して英国にも渡り見聞を広めました。特に工業力と軍事力に圧倒され、近代的な産業による富国の重要性を印象付けられます。

手島は英国の大学で勉強を続けたいと思っていましたが、経済的理由でやむなく帰国し、工業技術の発展とそのため教育の必要性を説きます。この啓発活動及び岩倉使節団の人脈を通して明治政府に任用され、製作学教場の実質的な運営を任されることとなります。ところが旧東京大学創立の際に職工的色彩の強い製作学教場は高等学術の場である大学にそぐわないとしてわずか 3 年で廃止されてしまいました。ワグネルと手島は、またしても厳しい立場に追い込まれてしまいますが、粘り強く政府の説得に努め、製作学教場に代わる「東京職工学校」の設置にこぎつけました (1881)。

設立当初は、士農工商の身分制度が長く続いた直後ということもあって、中等及び高等教育を受けるのは、まだいわゆる上流階級の子弟でした。彼等には、『職工』という名称がよくなかったのでしょうか、生徒が思うように集まらず苦戦を強いられます。名称変更（→東京工業学校→東京高等工業学校）や推薦入試の導入によって徐々に優秀な人材の獲得に成功するとともに、産業の近代化という国策にも後押しされ、工業技術教育の拠点として我が国の頂点に君臨することとなります。制度的にも (1) 若手技術者を育て社会に送り出す「本科」に加え、(2) 日本各地で工業教育を行うための「工業教員養成所」、及び (3) 既に社会で活躍中の技術者に新しい技術を習得してもらうための「工業補習学校」が附設され、工業技術の迅速な普及が図られます。この三点セットは今日から見ても理想的な教育体制といえます。工業補習学校は官立初の夜間学校として明治 32 年 (1899) に設置され、この流れの延長線上に専攻科があります。

このように由緒正しく最も正統派の工業補習学校・専攻科が姿を消さざるを得なかったのは残念ですが、夜学に通い日本を支えた人たちがいたことは後世に語り継がれ

るでしょう。創始者の手島やワグネル、さらには一時廃校の憂き目にあいそうになった専攻科の前身（工業補習学校）を救ってくれた洪沢栄一（日本資本主義の父）らも蔵前修工会の皆さんを誇りに思っていることでしょう。

艱難 汝を玉にす

以下では少し軽い話をしながら皆さんの労に報いたいと思います。昨年の総会の特別講演の依頼を受けた段階では、準備は、先に寄贈頂いた蔵前修工会の歴史資料を基に、専攻科の歴史をまとめた図一枚を用意し、後は写真を適当に集めればいだろうと軽く考えていたのですが、8月6日に喝を入れられる出来事が起こりました。きっと皆さんの脳裏にも焼き付いていると思いますが、リオデジャネイロ五輪の女子重量挙げです。三宅宏実が筋肉痛を抱え、力を発揮できない状態で、銅メダルに挑んでいました。2度失敗し、誰もがもうだめだと半分諦めながら見守る中、3度目の試技で見事成功しました。そして、なんと、一旦舞台から降りかけた三宅選手が急いで引き返し、バーベルを抱きしめ、ありがとうと言うようにさすったのです（図①）。このバーベルと同じように、専攻科に通った皆さんには抱きしめたくなるものがあるに違いありません。三宅宏実の努力と夜学で苦労された皆さんの努力が重なって見え、「よし！文章も用意しよう」と思い立って、資料館の「とっておきメモ帳9」（下記サイト）として纏めさせていただきました。御一読いただければ幸いです（図②）。

http://www.cent.titech.ac.jp/Publication_Archives/pg701.html

浅草 蔵前
(大正5年頃)

正門
高等工業本館
1881M14-1890M23-1903M34
工業補習学校
1899 M32



③

たばこ工場の3本煙突
隅田川

ワグネルは理工系のみならず語学の才能にも恵まれ、独語・仏語・伊語・英語など多言語に精通していました。東京職工学校での講義は日本語でしたが、英文の講義原稿を作り、それを助手に日本語に翻訳させてあらかじめ配ることにより、学生の理解を深める努力を怠っていません。多少聞き取りにくかったようですが、当時の学生は文句を言うどころか、「ワグネル先生の努力困苦を思うべきであります」と先生の気持ちに添えようとしたのです。

私たちの大学のシンボルマークはツバメです。今年の十二支（酉）にあやかって熟成の年になることを期待しつつ、次のような話を思い出しました。2008年3月9日付けの毎日新聞のコラムからの抜粋です。「...1月末から2月にかけて、中国は寒波に見舞われた。とくに南部が大雪で、越冬していた鳥たちも異常気象でつらかったろう。ベトナムに近い南の都市でのことだ。その市場の入り口でツバメが凍死していた。翼でなにかを抱きかかえていた。見つけた人が羽を広げてみると、翼の中はメスのツバメだった。冷たい雨に打たれてオスはメスをかばったが、巣作りのために北に渡る日を迎えることはできなかった。...」と続きます。日本もグローバル化の中で厳しい環境にさらされていますが、それに立ち向かうことができているのは、夜学に通って研鑽を積み日本を支えた皆さんのような人々の温かい翼のお陰です。専攻科を研鑽の場として選び、同窓会活動を通して長きにわたり社会人教育をご支援いただいた皆さんに感謝の気持ちを込めて本稿を捧げます。



①



②

手島校長は『勤勉』をモットーとして掲げました。「我が国に於いて煙突の立つ所、必ず蔵前の出身者あり」と口癖のように言っておられたそうです。夜学を含めた卒業生の活躍によって、『煙突の下に蔵前あり』と社会から讃えられるようになったわけですから手島校長も誇らしかったことでしょう。地理的にも蔵前校舎の隣には、たばこ工場の大きな煙突が3本立っており、まさしく「煙突の下に蔵前」があったのは確かです。



④



⑤

一日の仕事と勉強の後に見上げた星空④は、皆さんの心を充実感と高揚感で満たしてくれたのではないのでしょうか。農村で育った私には、一日の仕事を終えて家路につくときの夕暮れ⑤と心地よい空腹感が忘れられません。二度と帰ってこない至福の時に思いをはせながら、筆をおきます。